

## 入選

### コロナ禍で思うこと

熊本県 錦ヶ丘中学校

二年 岩本 椋太

コロナウイルスが世界に広がって、2年がたつ。何度も波が来ては、落ち着くということを繰り返し、制限されたこの生活スタイルにも慣れてきた。

この夏休みも特段大きな予定はない。僕の出かける先は、部活と塾のみだ。

今日も塾だった。クラスが終わり、いつもの道を自転車で帰宅する。大きな道路で、信号待ちをしていたときだった。横断歩道の向こう側で、おじいさんが転倒した。人通りも多い中、おじいさんはなかなか立ち上がらない。

「早く、誰か助けてあげて。」と心の中で叫ぶ。

でも、誰一人立ち止まらない。自転車も次々と横をすり抜けていく。

「早く、信号変わって！」と強く願った。

そのとき、ハッとした。僕は、マスクをしていなかった。もう帰宅するだけ。誰とも接触しないし、息苦しいからと、塾のごみ箱に捨ててきた。コロナ禍で、ソーシャルディスタンスをとるように言われている。マスクをしていない僕が話しかけたら、かえっていやな顔をされるのではないか……。

信号が青になり、横断歩道を渡り切るまで悩んだ。しかし、渡り切ってすぐ、僕は自転車を止め、おじいさんの手を取って、日陰の花壇にいっしょに座った。

「マスクをしていなくて、すみません。」と僕は謝った。おじいさんは、

「いや、ありがとう。本当にありがとう。」と言った。そしてしばらくの間、持っていたテキストで、おじいさんをあおいだ。

顔色がよくなったおじいさんは、

「今の時期、コロナだけじゃなくて、熱中症にも気をつけんといかん。いや、本当にありがとう。助かったよ。」

と、ずっと年下の僕に深々と頭を下げてくれた。僕も頭を下げた。

なんだろう……。僕は久しぶりに満たされた気持ちでいた。人間に戻れた、という感覚だった。

こんなにも長く続く、ウイルスとの戦い。人はどうしても、自分を優先してしまう。自分の命を守らなければいけないという、本能からだ。そうすると、ネガティブな行動をとってしまうこともある。

マスクの買い占めや、ワクチンの争奪戦、コロナに感染した人への誹謗中傷……。マイナスな気持ちになるニュースをたくさん見てきた。転倒したおじいさんに声をかけられなかった人たちは、感染リスクを恐れたのかもしれない。僕も、頭をよぎらなかつたわけではない。だけれども、困った人を目にしたとき、やはり助けてあげたい。だからマスクは捨てず、感染予防対策をして！

ギスギスした時代だからこそ、ゆずり合い、励まし合い、人に対して思いやりを示す。

人間らしくいようと、僕は思った。